

地理研の思い出　―発足の頃―

松　田　弘

横山先生から直々に表題についての原稿依頼があり、いざペンを執ってみると一向にペンは走らず困った。それもそのはず、もはや10余年前のこと、その記憶はよみがえらず、後輩諸君にさしたる自慢話を述べる材料もなく、安うけあいするのではなかったと、かえすがえす後悔しつつ無理にペンを執る次才です。

地理の誕生したのは昭和29年の春、私共3年生になった時と記憶する。小生が学友会総務にあたった関係で、なんとはなしにクラブ設立の申請をしたところ、いとも簡単に認められ、予算も当時のクラブとしては他にひけをとらぬ額であったように思う。

その頃の学部は、まだ師範の名残りをとどめ、上級生には師範から上った者、復員者ありで、新制大学としての体裁は整っておらず、社会科では、わずかに石崎先生中心のグループ（社研、歴研）ぐらいが動いている程度で、地理の方は今井先生が学部長という要職にあり多忙のため、ひとり学生間で適当にやっているというのが実情であった。

私共27年入学の中学科には、どうしたことか地理を専攻しようというのが6人もおり、（うち八高卒3人、青高、弘高、育一高卒各1人）その殆んどが寮生ということから、連帯感は強く、研究室というものもなかったのに、結構話は通じたもので、同志としての結束は強いものがあった。

この年の活動としては、夏休み中の北海道一周旅行であった。3年生5人だけの、当初は巡検と銘うつものであったが、どちらかといえば研究旅行、観光中心といったものになってしまった。それでも今の学生トラベルとは異なり、大学寮、小学校の当直室をめぐらしたもので、学生の特権を十分に生かし、今ではとても体得しがたい旅であった。やはり体で得たものであるだけに10余年経た今日でも忘れ得ぬ思い出であり、結構生きた教材として役立っているように思う。特に小学校の当直室で、一升瓶を前にして宿直教師共々膝をまじえて教育論を談じた想　出は終生忘れ得ぬところである。

翌30年は地固めの年といたいところだが、依然として、一部学生のための地理研であったようだ。組織化、後輩の指導などということになれば、今思えば冷汗もので、私共さえよければよいという活動であった。私個人としては今井先生には一方ならぬご指導をいただき、地理研に対する先生のアドバイスもありがたいものであったが、先生はご多忙ということで、私共の活動の中に入っていただくことはできず、学生の自主的活動ということが、やはりうまくなかったように思う。

そんなこともあって、夏休みには酒井軍治郎教授の地学実習に、一部地理研部員の参加となっ